

★（朝鮮半島問題）対話と合意の積み重ねこそ＝磯崎 敦仁（慶大准教授）

北朝鮮の金正日（キム・ジョンイル）国防委員長と韓国の金大中（キム・デジュン）大統領による史上初めての南北首脳会談（2000年6月13日～15日、平壤）の開催から20年。朝鮮半島における歴史的な転換点となった会談はどういうものだったか、今にどう影響しているのか、北朝鮮政治が専門の磯崎敦仁慶応義塾大学准教授に話を聞きました。（聞き手 栗原千鶴）

朝鮮戦争（1950～53年）をたたかった両国は、互いに長年、強い不信感をもっていました。会談で両首脳がかかわった握手は、対話で平和を築く、その一步を踏み出したものだったと評価できます。

両首脳が交わした南北共同宣言は包括的な合意で、のちの南北関係の道筋をつけるものとなりました。

2007年に盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領が金正日氏と、18年には文在寅（ムン・ジェイン）大統領が金正恩（キム・ジョンウン）国務委員長と会談し、共同宣言を土台にして具体的な合意をしました。20年の間には軍事衝突の危険が伴った事件も発生しましたが、共同宣言の道筋によって、話し合いで解決していく努力がなされ、戦争の可能性は低まったと思います。

衝突さけ共存

一方で、履行できていない合意もあります。北朝鮮首脳のソウル訪問や南北統一です。

統一問題については共同宣言で、民族同士で力を合わせて解決していくことを約束しました。韓国にとって統一は憲法にも明記された至上命令ですが、実際は統一の前にやることがある。衝突を避け平和・共存していくことが優先されています。

各種世論調査で、韓国の人々は「統一したい」と思っているが、時期について「いますぐ」と考える人は約一割。北朝鮮の脆弱な経済状況では、韓国に負担が大きいことをよく知っています。半面、対話政策を続けることは、北朝鮮の体制の長期化を招くことにもつながります。そう考えると統一はかなり先の話だといわざるをえません。

理解が深まる

初会談を契機に韓国では、北朝鮮にたいする理解が進みました。

当時、私は留学生としてソウルに住んでいました。印象に残っているのは、テレビに映し出された北朝鮮を象徴する「主体思想塔」に、間違っただ映像が使われていたことです。それくらい韓国の市民は北朝鮮のことを知らず、イメージで語っていた。会談後は北朝鮮を客観的に、実体化するようになりました。

南北を題材にした映画やドラマも多数作られました。いま日本でも人気がある韓国ドラマ「愛の不時着」は、北朝鮮の兵士と韓国の財閥令嬢を主人公にしたラブコメディです。描かれている内容は北朝鮮の実態や現在の南北関係からはかけ離れているものの、物語として楽しみ、北朝鮮ではこのような言葉が使われているのかと新しい発見もする。北朝鮮に住む人々に想いを寄せている姿に変化を感じています。

複雑さが露呈

残念なことに最近、北朝鮮が南北連絡回線を廃棄し、16日には、南北共同連絡事務所を爆破するという強硬策に出てきました。

北朝鮮は、18年に文在寅大統領と金正恩国務委員長が会談してまとめた南北合意を韓国が順守していないとして強い怒りをぶつけています。韓国を口汚く非難し、武力行使の可能性にも言及した談話は、北朝鮮国内でも周知されており、関係悪化を国民にも予告した形です。北朝鮮としては、韓国側の大胆な措置がなければ、さらに強硬な措置にでるでしょう。背景には、米朝関係が停滞していることへの不満もあるようです。北朝鮮問題の複雑さが、また露呈しました。

南北関係は、3歩進んで2歩下がるような、ゆっくりとした歩みです。もどかしいですが、対話と合意、成果を積み重ね、互いの不信感を払しょくし、前進していくしかないでしょう。

(しんぶん赤旗 2020年6月19日付)